

Title	森有正研究 : 「人間」と「思想」の意味、および「日本人の思想」との関連性
Author(s)	小林, 雅博
Citation	2008 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2080
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

2008年度

博士論文要旨

(指導教員 古屋安雄教授)

森有正研究

—「人間」と「思想」の意味、および「日本人の
思想」との関連性—

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

(博士後期課程)

105DC002 小林雅博

■ 論文の要旨

本研究の目的は、わが国においてまだ思想家として正しく評価されているとは言えない、森有正の思想を解明し、これを日本の思想の中に位置づけることにある。森はフランス留学による転機によって、人間と思想の関係についての根本的な問題を与えられ、かの地で忍耐強く生活と思索を続けながら、思想や文明の背後にある人間経験に関する独自の見解に達した。彼はそこから日本人の経験と思想という問題についても深く切り込んで重要な洞察をもたらした。本研究は森有正全集を中心とするテキストの解釈によって、森有正とは何であったのかという根本的な問題に対して一つの見解を導き出し、合わせて日本の思想における彼の意義を考えようとするものである。論文は序章も含めて全体で六章によって構成される。

序章 森有正研究という問題

序章では、まず森有正を理解することの難しさについて考え、これまでに書かれた主な森有正論を概観した後、われわれのアプローチを模索した。森の思想を理解するのが困難であるのは、第一に彼が体系的な思想家としては失敗していることである。彼が残した主要な著作はエッセーであり、それらはそのままでは普遍的な思想であるとは言えない。第二に、森の思索の中心的事柄である「経験」が、言語によって表現することの難しい何かであること。第三に、森の思索が哲学、文学、言語、芸術といった幅広い領域に亘っていることである。われわれはこれに対して次のように彼をとらえたい。まずエッセーというテキストの中から、できるだけ合理的な思考の道筋を導き出すべきであること。そのためには彼が独自の定義をしている言葉に沿って彼の思想を再構成するように試みること。次に思想とは生きることそのものであるという森の立場を重んじ、われわれもまた彼の歩みを追っていくこと。その場合に文体の変化を参考にしながら、渡仏後における彼の思想的発展をいくつかの時期に分けてみること。基本的には森をヨーロッパと関わった日本人の思想家として見ていくことなどである。またこれまでに書かれた森有正論については、森と直接関わった事実上の弟子や友人たちの書いたもの、森有正を読むという体験から独自の論を書いたもの、そして森有正を何らかの思想的連関の中に位置づけようとするもの、という三つのグループに分けて考察した。また彼を研究すること自体が彼の思想に反するのではないかという問題についても述べた。

第一章 森有正の転機

第一章では「邂逅」というキーワードによって、森の渡仏以前と以後との間に起こった変化をとらえようとしている。邂逅とは森にとって、人間実存の部分において起こる「現実」との出会いであり、思想の出発点としての意味をもっていた。そしてパリは、まさに彼にとってそのような邂逅の相手となった。この邂逅には内的外的契機があると考えられるが、森の場合、内的契機としては渡仏以前から彼の裡ににあった学問や生への疑問に加え、彼が深く学んでいたデカルトとパスカルの思想、さらにドストエフスキーの影響があったと思われる。森はデカルトから、人間が主体的に生きて自分の思想をもつことの意義を、またパスカルとドストエフスキーからは、他者を他者として認め、他者との関係によって自己が作り変えられることの意義を学んだ。これらの学びによって森の中には「自分の生を生きたい」という強烈な主体性への願いが生じ、またパリという他者との関係によって自己が変容を受けることにもつながった。一方邂逅の外的契機であるパリは森にとって、それまで言葉のみによって構築していたフランスの思想や文明の像を打ち破る、真の「現実」として迫ってきた。この邂逅により、森はそれまでの自分の知をラディカルに否定し、新しい現実との接触から受動的に与えられる「パトスの知」によって、自己の思想を再構築しようとした。そこから彼の新しい歩みが始まり、やがて彼独自の言葉による作品を生むことになった。

第二章 「思想的文学」の誕生

第二章では森の渡仏後に書かれた最初のオリジナルな著作である『バビロンの流れのほとりにて』（1957年）を取り上げ、前章で見たところの森の姿勢の変化を作品の中に読み取ろうとした。まず前半においては、作品成立の背景にあった状況を見るとともに、これを作者から独立したひとつの文学作品として位置づけようとした。背景としては、パリ滞在を延長した森がそれによって象徴的に裸となり、自己の思想を再構築する新たな出発点に立ったことが強調される。またこの作品に描かれているのはヨーロッパであるとともに人間の内的世界である。『バビロン』は、目に見えるものを描きながら目に見えない自己の内面を凝視するという意味で象徴的な作品であり、それはヨーロッパと自己との相互関係を描いた物語である。二章の後半では、これを主人公「僕」の物語として具体的に読んでいった。まず冒頭において主人公は自身の裸になった人間存在（運命）を見つめ、そ

こから偽りのない言葉を書こうと決意する。イタリアの旅においては文明と自分との関係が逆転したことが描かれるが、そこから「僕」は自分の「魂の空間」に対する自覚を深めていく。その自覚はやがて持続する「経験の流れ」の発見となり、これによって彼は西欧の思想や文明の問題を、自己の内面の問題として理解する視点をもつようになる。彼は文明のかたちを自分の感覚と経験によって再発見すること、すなわち「定義」することが彼の為すべきことであると悟る。こうして物語を通して森有正の思想の基本線である、「感覚→経験→定義」の道が明らかとなる。

第三章 森有正の方法

第三章では『バビロン』に続く作品である『流れのほとりにて』、『城門のかたわらにて』を中心に、森が「思想」へと向かって行く道のりを明らかにしようとした。まず思想とは森にとって、他人の思想を頭で理解することではなく、自分自身が世界を前にして「歩む」ことであった。その一方、言葉で組織された思想はあくまでも客観的な実体性を備えたものとして重要であった。そこに至る段階はまず「感覚」から始まるが、感覚とは自己とある対象が直接的に接触することであり、森は思想や造形につながる感覚をとくに「純粹感覚」と呼んでこれを追求した。次にその感覚が成熟していく過程が始まる。それはまた自己の内面に「時間」が生れることでもある。この過程によって、個人的な感覚はしだいに高められ、実体性を帯びてくる。このように高められまた実体化した感覚を「経験」と呼んでよいと思われるが、それが言葉と結びつくとき森はこれを「定義」と呼んだ。定義において感覚は普遍的で万人に開かれたものになる。森にとって「書く」こととは、主観の成熟から「もの」としての言葉を生み出すことによって客観へと飛躍することであった。彼にとって思想の道はまた「人間」としての完成への道でもあった。それは古代ギリシア人が自然の中から人間の形を刻み出したような厳しい「意志」の道であり、またアブラハムが神の導きによってヒューマニズムよりも更に厳しく人間とされていった道でもある。森はこうして西欧の根本にある人間形成の道を学びつつ、自己自身が一箇の組織された思想になることを目指して歩んでいった。

第四章 「経験」と日本人の問題、そして結論

第四章においては、後期のエッセーから主著である『経験と思想』までを考察し、「経験」に関する森有正の成熟した思想をとらえようと試みた。森が独特の意味をこめて語った「経

験」には、フランス・モラリストの影響が認められるが、それは本質的に語りえないものであり、心で感じるしかないものである。しかし経験は自己に与えられた現実そのものであり、そこでは主観である自己と客観である世界が共に存在している。また彼は持続する「時間」としての経験を、「内的促し」、「体験ではなく経験」、「変貌」という言葉によって特徴的に説明した。そこから分かることは、森の言う経験が決して過去のことのみを言うのではなく、むしろ未来に開かれており、現実には抵抗しながらこれを克服していく姿勢をもっていることである。次に「経験」と「思想」の関係であるが、ここで最も重要なことは、三人称である思想と一人称である経験とが弁証法的に結合していることであり、この両者をつなぐのが自覚した一個の人間であるということである。さらに森は「日本人の経験」を論じたが、そこで彼は戦後の日本における経験と言葉の乖離を批判し、日本人の思想は日本人の経験から出発するべきであると主張した。しかし、その日本人の経験が一人称になれないことを彼は「二項関係」という言葉によってとらえ、また日本語の特徴を分析することによってそれを批判したが、日本人が本当の思想をもつための処方箋としては、地道な努力によってこの二項関係を変えていくしかない、と述べるに留めていることを示した。

最後にわれわれは森有正の晩年について触れ、その後で彼の思想的な意義を次のように考えた。まず思想や文明を外に見える形ではなく、一人の人間の感覚にまで遡ってこれを内面的にとらえ直したこと。そのことによって、「客観的」に扱われている思想の言葉における主観性の意味を強調したこと。さらに思想における主観と客観の関係から、個人と社会の関係を見出したことである。この最後の点はとくに、日本の真の民主化という問題に対して意義を持っている。森有正のすべての歩みは「人間」という言葉の豊かな定義である。しかしそこには実存的な自由と宗教的な自由との相剋があり、そこから罪の問題が鋭く意識されている。これを最終的に解決するのが信仰であり、彼が定義する「人間」は宗教、具体的にはキリスト教によって批判的に支えられている。そして森有正は最後まで、行動によって思想を語った人間であったと結論した。

以上

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

(博士後期課程)

105DC002 小林雅博